

## 周辺からの記憶 50

### 2023年度シンポジウム

# 震災を語り継ぐ～いのちのバトンを手渡すために

## 村本邦子（立命館大学）

1月29日から2月4日まで、台湾に行ってきた。この時期、毎年のように台湾に行っているが、今回のテーマは、日本が与えた植民地時代や戦争中、戦後の影響である。そのなかでも印象深かったのが、霧社事件のことである。「セデック・バレ」(2011年)という長編映画があり、「セデック・バレの真実」(2014年)というドキュメンタリーがある。一昨年、霧社で、モーナ・ルダオの子孫にあたる方のお話を聞いた。その時に、彼は「正当な語り部」であるが、その弟や女性の話も聞いた方がいいと紹介してくれたが、時間が足りず、「またあらためて来ます」と帰ったので、それを聞くためだった。

総じて、びっくりするような話、そんなこともあるだろうという話、まさかそれはないだろうと思うような話が混在している。かなり重要な部分で、上記ふたつの映画の話とはまったく違った話があった。最初に語られたのは国民党時代で抗日英雄の話が必要だったため、また映画を面白くするためだろうという。1930年の事件なので、今となっては、その時代を直接知る人はおらず、みんな伝え聞きであるため、何が本当なのかは藪の中だ。

あらためて、歴史を記録するとはなんと困難なことだろうかと思う。ひとつの出来事でも、誰がどんな視点から語るかによってまったく異なる話になるし(インドの寓話「6人の盲人と象」のように)、意図的歪曲もあるだろう。東日本大震災をめぐる私たちのプロジェクトの「証人になる」も、それだけに一筋縄でいかない。それでも、私たちは、社会のなかで誰からも耳を傾けられない声、多様な小さな声に耳を傾け、可視化していこうと志している。未来、私たちがいなくなった後、いつまでこのオンラインマガジンが残るのかわからないが、とにかく記録を続けていきたい。



## 第一部 東北各地の今を語る 院生報告

2023年9月23日、「東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)2023年度シンポジウム 震災を語り継ぐーいのちのバトンを手渡すために」を開催した。最初に簡単にプロジェクトの紹介をしたが、数えてみると、13年間で延べ370名もの立命館メンバーが東北4県13ヶ所に赴いて活動していた。まず、「第一部 東北各地の今を語る」ということで、今年度のプロジェクトに参加した院生4人が報告してくれた。



東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)2023  
震災の記憶：いのちのバトンを手渡すために  
「親から子へ、前の世代から次の世代への大きな伝承。」  
「つながり、聞き、受け取り、伝えること。」

9月1日(金) 午後：震災遺構中浜小学校訪問、宮城 やまもと民話の会の方との交流  
9月2日(土) 午前：仙台市内みやぎ民話の会の皆様との交流、宮城 午後：多賀城実行委員会と多賀城市内フィールドワーク  
9月3日(日) 午前：「東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)2023 in 白河」福島 午後：浪江町から白河に避難して生活している方々から、高校生がインタビューをする  
9月4日(月) 午前：福島県楢葉町伝言館 安齊有郎先生と懇談、福島 午後：フィールドワーク、伝承館  
9月5日(火) 午前：古滝屋 震災考証館、Fスタディーツアー参加、福島

東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)2023

- ・10年間のプロジェクトは終わっても、福島のことを忘れてはならない。
- ・これまでのプロジェクトでつながった方々とのつながりが続いている。

⇒ + (プラス)

証人になる

行程

9月1日(金) 午後：震災遺構中浜小学校訪問、宮城 やまもと民話の会の方との交流  
9月2日(土) 午前：仙台市内みやぎ民話の会の皆様との交流、宮城 午後：多賀城実行委員会と多賀城市内フィールドワーク  
9月3日(日) 午前：「東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)2023 in 白河」福島 午後：浪江町から白河に避難して生活している方々から、高校生がインタビューをする  
9月4日(月) 午前：福島県楢葉町伝言館 安齊有郎先生と懇談、福島 午後：フィールドワーク、伝承館  
9月5日(火) 午前：古滝屋 震災考証館、Fスタディーツアー参加、福島



初年度からずっと、プロジェクトを共に実施する  
方々から学ぶ  
(9月2日(土)トレーラーハウス、多賀城駅周辺)

NHK 空想のニュース

2020年 オンライン開催  
漫画トークあり。  
「DMAT 隊員と被災者・行政が見た多賀城」  
増尾佳苗さん(大津赤十字病院 DMAT 隊員・災害看護  
災厄を生きたにも登場)  
「災害救護者が再び臨地に立ち知り得た事」  
丸山隆さん(当時、多賀城市建設部都市計画課次長・課長)  
「被災者の目・行政の目で見えた東日本大震災の記憶」

2021・2022年 現地開催



プロジェクトの中でできた、語り合うことのできる関係

2012年 多賀城市での初企画  
「特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ」「障害子ども支援ネットワークみやぎ」と此所人間科学研究所共催。おおぞら保育園の形で、10月7日、多賀城市公民館にて、家塚洋画家、田土郎先生の漫画トーク「本物の物語」と村本先生の「支援者のための支援道具」を開催。

2013年 多賀城図書館

この地域の方が  
次世代に残した  
もの

宮城県多賀城高等学校の学生が津波がこたまで来たという目印を町のいたるところに作った。  
現在市内120箇所を設置しており、現在も設置活動が続いている。

2014年 多賀城図書館、多賀城民話の会との共催 2015年

2016年 多賀城市立図書館の運営形態変更

震災に関する  
冊子  
(丸山さん作成)

2017年 多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園 隣地の対人援助学に登場  
10月6日(金)～10月22日(日)  
山形大学上山真知子先生の講義。沿岸部の史料レクチャーとレジリエンスの話

新しい多賀城市立図書館に移って二年目。駅前はずいぶん変わって、被災後、二、三年頃の面影は消えつつある。妙用川も遊路も位置は変わらないが、あの遊路の産ぐむこうはクローバー(狭義)があった・・・と思いつくことばかり出てきて、今そこは駐車場。駅周辺の空気も大きく変わってきているのを感じる。図書館も利用者によって変わってきているのか、当たり前感の賑わいが漂う場になっている。(田先生)

2018年 多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園  
10月5日(金)～10月12日(日)  
会場は二階奥の、オープンスペース…三階の部屋よりもいい。…今週から始まって、月末までの長期間開催(短縮していない?)。会場横に配置された長椅子が、少しの時間浸っていた人や、小冊子その場で読む人にとって、良い場所になっていた。短時間、私もそこに座って様子を見ていたのだが、その間に三人の方と言葉が交わることになった。(隣りから見た二人連れは自分の子ども世代(所謂おち)に見えて欲しいと思うと話した。その時、長椅子で熱心に冊子を読んでいた女性がその会話を聞いて、「作者の方ですか?」と話しかけ…と自分の事情を語り始めた。…空間と物語が作り出す雰囲気の中での会話になった。(田先生)

2019年 多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園  
9月19日～10月8日  
今回の多賀城が一番感じたのは、誰の何がと言うのではない、図書館スタッフも、こちらのスタッフも、全体として今後に向けて、何が考えられるだろうと当たり前のようには議論する姿勢だった。これが素晴らしい、定着するというのだろうか。10年目を迎える来年、その後のことを考えることが今からのテーマになっている。(田先生)

丸山さんの経験に基づく知識が記載されている。



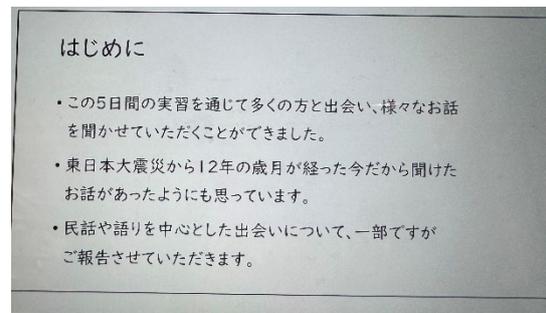
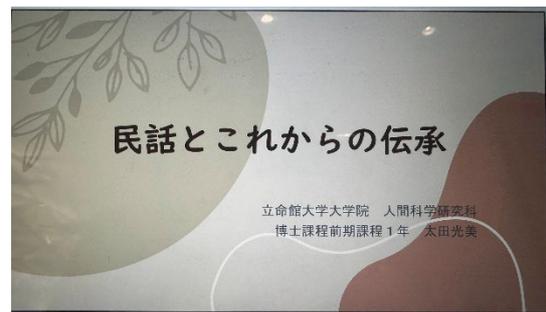
一番バッターの武田明恵さんは、シンポジウムのサブタイトル「いのちのバトンを手渡すために」に触れ、「実習を通じて、世代を越えた伝承が起きている中に入れてもらったので、お裾分けしたい」と報告を始めた。

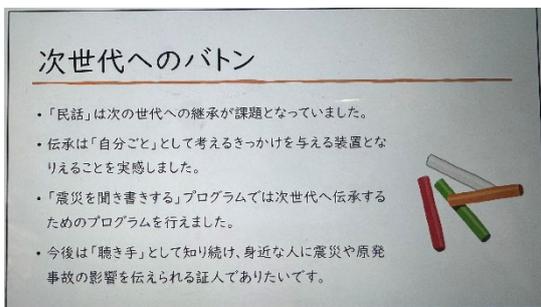
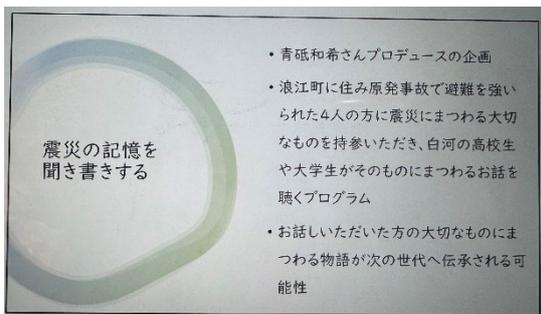
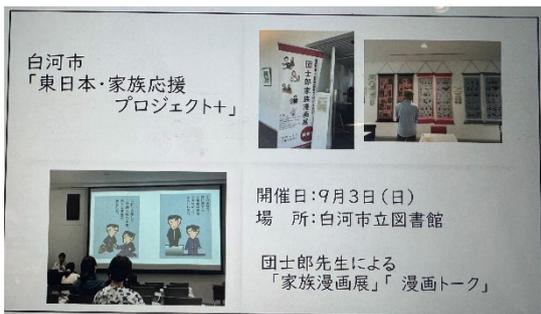
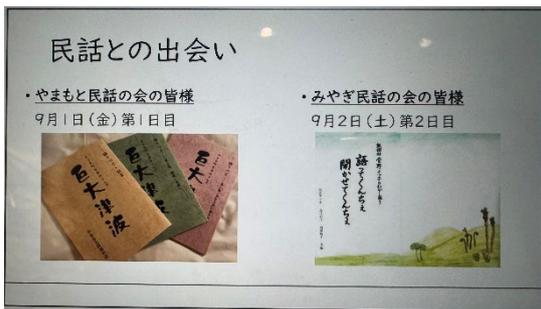
白河で行った団士郎トークイベントでは、10年以上前に二本松で開催した時に参加してくれた人が来てくれたことから、「プロジェクトが続いているというのは、また会えるということ」「また会えるというのはとても大切なこと。前を知っているから、今を語れる」。多くの人とこうして出会えるのも、10年間のプロジェクトが今なお続いているからだ。そして、多賀城でのプロジェクトの12年間の記録を写真で振り返ったうえで、今年度の報告をしてくれた。

震災後に保育を再開したおおぞら保育園トレーラーハウスの中で、多賀城プロジェクト実行委員会を担ってくれている丸山隆さん、黒川恵子さんと語り合った。被災の経験について語り合うという二方向を超えた関係性がそこにはあり、多賀城の地域の人たちが次世代に残したものがあつた。それは津波襲来の痕跡の目印で、多賀城高校の生徒たちが設置活動を続け、現在、市内120ヶ所にある。経験を風化させない伝承のひとつである。それから、丸山さん作成の冊子には、丸山さんの経験に基づく知識がたくさん記載

されている。災害に有効なグッズ一覧、地震が来てすぐは水が出るので、その間にお風呂の水を溜めることができれば4日程度のトイレの水洗に使える、サランラップを敷いておけば、コップや皿を洗わなくてよいことなど。今すぐできることとしては、常備薬を携帯しておくこと、保存食やティッシュなどのストックを持つておくことなど。

最後に末の松山に向かう実行委員の背中の写真、この姿に、「伝承ってこうやってやるんだよっていうふうに言われているような気がしました」と語った。語り継ぐべきことを風化させないための小さな工夫を、プロジェクトが拡声機となって学生に届ける。学生は証人になる前に伝承を受け、つながり、聞き、受け取り、伝えるということがどうということなのかを学ぶ。「私の胸にちょっと青い炎が燃えています」と報告を終えた。院生の視点に私たちも学ばされる。





太田光美さんの報告は、「民話とこれからの伝承」。1日目、やまもと民話の会との交流で、寺島重子さんから「下田沼の大蛇」「宝下駄」の民話を聞いた。会の方は、震災時のことを、「自分のことで精いっぱい状況下だった」「震災の状況を聴いて残していく活動によって心が落ち着いた」と当時の思いを聞かせてくれた。また、2021年に亡くなられた庄司アイさんについて、自分の体験と重ね合わせて証言を聴いていたため、聴いた後は寝込むほど疲れ果てていたとのことだった。

2日目、みやぎ民話の会との交流。島津信子さんからは、「放射性物質による被害に力が及ばないと思いながらも、原発事故によって変化した生活について話を聴き、語り継ぎたいと思った」と伺った。長正サツキさん、山田裕子さんからは今年5月に亡くなられた「かんのてつこ」さんから飯館村の民話やご本人の生い立ちについて聴かれたときの話をお聞かせもらった。出版された『語ってくんちえ聞かせてくんちえ』では、本の表紙のように美しい飯館村の昔話や村での暮らし、原発事故後の避難生活について残しておきたいという思いでまとめられたそうだ。

次に、「東日本家族応援プロジェクト+ 2023 in 白河」について。白河市立図書館で開催した団士郎漫画トーク、「ホッと一息おもちゃであそぼう」、「遊びとお話のひろば」。それから、一般社団法人未来の準備室の青砥和希さんプロデュース「震災の記憶を聞き書きする」が実施された。原発事故で避難を強いられた浪江町の方々の「震災にまつわる大切なもの」を持参してもらって、白河市の高校生や大学院生がそのモノにまつわる話を聴かせてもらった。

当時大学生だったWさんは、原発事故により避難を強いられ、生活が大きく変化した。家族それぞれが異なる土地に避難せざるを得なくなり、連絡の取れない日々を過ごされた。大切なモノは、両親が自宅に戻って持ち帰った3人の子どもがそれぞれ1年生だった時に撮影された家族写真で、「お金で買えないもの」だった。

Nさんは当時高校2年生で、すぐに帰って来れると思っていた。弟が漫画本を持ち出したことに呆れたが、避難所を転々とする生活では漫画を兄弟で回し読みすることで少し生活が豊かになったという。避難生活は暇でストレスフルとなり兄弟げんかが多くなる中、兄弟で始められた避難日記を持参された。

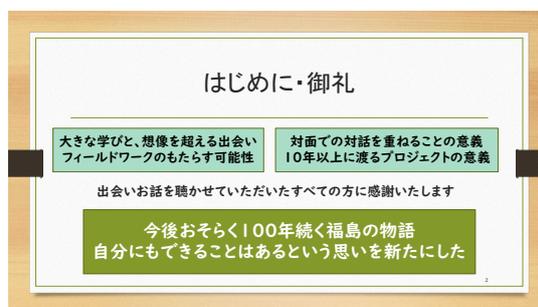
このようなお話を震災当時4歳や小学生だった人たちが聞き手となるこのプログラムは、次の世代へ物語が伝承される可能性を感じた。

民話は高齢の方たちが中心となり収集活動をされているため、次の世代への継承が課題となっているが、証言集や本による伝承は後世まで多くの人に伝えることを可能とし、今回私たちが聞かせていただいたその土地の言葉で語られる伝承はしみじみとした余韻が残り、その土地の生き生きとした力を感じた。

東日本大震災による地震や津波、原発事故による被害についての伝承は離れた土地にいる人や後世の人に自分事として考えるきっかけを与える装置、つまりバトンになると考え、「震災の記憶を聞き書きする」プログラムは東日本大震災から12年経過しているにもかかわらず、今なお原発事故による新たな課題が発生し続けている今だからこそ、次

世代へ伝承するプログラムを初めて実施できたのではないかと考えた。

みやぎ民話の会の方からカンノテツコさんは村一番の語り手だった母親のキクさんが亡くなられた後から民話の語りを始められたと聞いた。語りのきっかけには聞き手の存在があった。太田さんは、「私は、今後、震災や原発事故の影響を知り続け、小さな物語を聴き、伝えられる証人でありたいと考えています」と報告を結んだ。



### 現在の犬熊町の様子

- 「復興が順調である」というイメージを印象付ける最新式の住宅が立ち並ぶ一方で、12年前の崩れかけた住宅もそのまま残っている町並みは、不思議なバランス
- 車内であっても居住可能とされる0.23μSv/hを大きく超える場所も散見された



### 江戸時代から続く窯元の避難先での仕事と復活までの道のり

- 山田慎一さん(避難先のハローワークで公園管理や倉庫片付けの仕事を紹介してもらえず。資格がまったくなく、相馬焼以外の経験がないからとのこと。)
- 松永和夫さんも同じようなご経験をされている(公共施設の募り)
- 浪江町の犬塚相馬焼の歴史を背負ったお二人は、移住先の白河で窯元として見事な復活を遂げられている。




### 福島で原発事故にまつわるお話を聴かせていただいた方々



- 立命館大学特命教授・名誉教授、ヒロシマ・ナガサキ・ヒロニ・フクシマ伝言館館長 安齋啓郎 先生
- ヒロシマ・ナガサキ・ヒロニ・フクシマ伝言館 事務局長 丹治彩江さん
- いわき湯本温泉「古滝屋」第14代店主 原子力災害考証館館長 藤原基広さん
- 犬塚相馬焼「いかりや商店」3代目店主 山田慎一さん
- 犬塚相馬焼松永陶器店 3代店主 松永和夫さん

### 旅館を再建しながら未来づくり業へ転身

- 旅館は1年4か月の休業のちに営業再開。
- 古滝屋内に「原子力災害考証館」を建て、震災の記憶を伝えようとしている。
- 「Fスタディツアー」という原子力災害を考察するフィールドガイドを務める。
- 「NPO法人ふよ±2100」を設立し、障害児支援。「おてんとSUNプロジェクト」を立ち上げ、衣食住の持続可能社会に注目。



### お仕事の話をお聴かせいただきキャリアについて考えた

- キャリアとは、多義的な意味を持つ包括的な言葉であり、一つの定義では収まりきれない意味の広がりがある。一般的には、広義では「生き方」、「人生」、「経験」、狭義では「職業、職種の連鎖」等と表現される。

語っていただいた「物語」の中に「キャリア」があふれていた

### 小さな物語を語り継ぐことの意味

大きな物語	+	小さな物語
東日本大震災・原子力災害 伝承館	ともに歴史に残すために私達のできることに	原子力災害考証館
放射能の医学的影響		放射能の心理的影響・社会的影響 生存意欲毀損効果
犬塚相馬焼の伝統		避難先での仕事
東京電力福島第一原発事故裁判の結果		復活までの物語
		避難先からの移住の覚悟
		早川和尚との物語

### 科学者が科学の側面以外の訴求をする意味

- 東京大学工学部原子力工学科の1期生でありながらその人生をかけて原発反対に動いていらっしやる安齋先生
- 放射線の影響は医学的影響だけではなく、心理的影響・社会的影響・生存意欲毀損効果が大きく、そのことを福島での活動を通して気づかれたとのこと




最後は東知佐子さんで、「福島の物語は今後おそらく100年続く、その中で自分にできることは必ずあるという思いを新たに」と報告を始めた。

### 避難先から福島に戻ってきただけの活動

- 「伝言館」事務局長 丹治さん。震災後、群馬県前橋市に避難していた。
- 13年9月に裁判を起こした。世界最悪レベルの事故の責任は東電だけではなく、国にもあると認めさせるためだった。
- 伝言館の設立者で、原発を訴え続けた住職の早川篤雄さんが昨年12月、83歳で死去。館の存続が危ぶまれる中、早川さんをお願いされた丹治さんは、前橋市から福島に戻り、手弁当で「伝言館」を引き継いでいる。



現地では、福島第一原発のある、犬熊町を案内してもらった。12年経っても、地図の灰色の部分、帰還困難区域がこれだけ残っている。その中にある濃いグリーンに塗られた地域は、除染・インフラ整備等を集中的に行い、住むことを可能とした「特定復興再生拠点区域」である。最新施設の学校が今年開校し、0~15歳まで30人程度が学んでいるそうだ。

最新の建物が並ぶ一方で、路地に入ると12年前に崩れた住宅がそのまま、何ともいえない、不思議な感覚に陥った。車で案内頂くと、居住可能とされる0.23 $\mu$ Sv/hを大きく超える場所もあった。除染作業の道のはまだまだ遠いのだと思わされた。

福島で原発事故にまつわる話を聴かせていただいた5人の方々の物語を紹介する。主にキャリアの話をお聴きした。キャリアとは、広義では「生き方」「人生」という意味がある。まさに5人の皆さまの生き方、人生に触れたと思う。

立命館大学特命教授・名誉教授であり、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館館長の安齋育郎先生。東京大学原子力工学科の1期生でありながら、人生をかけて原発反対に動いていらっしゃる。放射線の影響は医学的影響だけではなく、心理的・社会的影響や生存意欲毀損効果が大きいと仰られていた。

同じく「伝言館」で今年から事務局長になった丹治杉江さん。震災後は群馬県前橋市に避難されていた。原発事故により避難した一人として、裁判を起こされている。伝言館の設立者で、反原発を訴え続けた住職の早川篤雄さんは昨年12月、83歳で死去された。病床の早川さんに頼まれた丹治さんは、避難先の前橋市から福島に戻り、手弁当で伝言館を運営されている。

大堀相馬焼いかりや商店13代目窯元Yさん。江戸時代から続く窯元は、避難先の東京では公園管理や倉庫片付けの仕事しか紹介されなかった。理由は資格や経験がないからとのこと。大堀相馬焼松永陶器店3代窯主Mさんも、避難先で公共施設の草刈りの仕事をしていたそうだ。お2人とも現在は

白河に移り窯元として復活。賠償はそれ相応にはあったが、新天地で相馬焼を再開する資金でほとんどなくなると、Mさんは原発事故への憤りとともに話してくださった。

いわき湯本温泉「古滝屋」16代当主の里見喜生さんは、震災で大きな被害を受けたが再建し、旅館を継続しながら、館内に原子力災害考証館を建て、「フスタディツアー」のガイドを務めたり、未来をつくる様々なプロジェクトを運営している。仮に、歴史上の大きな流れを「大きな物語」と呼んだとき、そこに現れない小さな物語が存在する。震災と原発事故を語り継ぐ博物館として、東日本大震災・原子力災害伝承館があげられるが、地元の方からは、国と東電の作った施設であることを意識してほしい、と言われた。

それに対して、早川和尚が作り、安齋先生と丹治さんが引き継がれた伝言館や、里見さんの作られた考証館は、小さな物語を紡ぐ施設だ。放射線は医学的影響がクローズアップされるが、それ以外の側面も命や健康に大きな影響を与える。大堀相馬焼の伝統の中で、窯元の避難先での仕事や復活までの物語は小さな物語になるのかもしれない。裁判の結果は歴史に残るが、福島に戻り戦う覚悟を決められた亡き和尚との物語こそ、歴史に残したい。「今回の学びにより、私は小さな物語を語り継ぐことの意味を知りました。それらも含めて歴史とするために、証人の存在が大きいのだとも学びました」ということだった。

4人目の報告は博士課程後期課程の河野暁子さんで、最後には院生それぞれの学びが紹介された。



### 新たなミュージアムと大学院生の学び

立命館大学大学院人間科学研究科  
博士課程後期課程 河野曉子

### アート作品の展示

- アート作品は力強い
- 作品を見て、「これは何だろう?」
- 解説を読んで、「そういう意味だったのか...」
- もう一度作品をじっくり眺める
- 様々な感情がわいてくる
- チェルノブイリ博物館の中にも、アートを使った展示があった

個性的なミュージアムが次々に設置されてきていることで、より多声的になる



### 大堀相馬焼



画像出典：浪江町HP

画像出典：松永窯HP

- 道の駅のみえて、大堀相馬焼の商品を見かけた
- 前日にお話を聴かせていただいた。窯元の方々の商品だった
- 実際に会った方と商品がつながり、より心に残る体験であった
- フィールドワークを行うと、点と点とつながっていく感覚になる

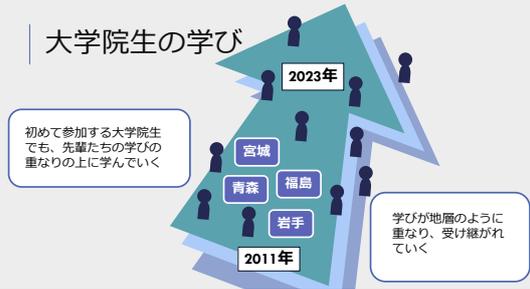
### おれたちの伝承館



- 福島県南相馬市小高区
- 2023年7月12日開館
- 館長：中筋純氏（写真家）
- 小高駅近くの双葉旅館を中心に、中筋氏やボランティアたちが空き倉庫の除染をし、2カ月で開館へこぎつけた
- 21名のアーティスト、約80作品を常設展示
- 「おれ」とは、浜通りや全国各地で使われる、性別を問わない一人称
- 原発事故はすべての人にとっての問題であり、その伝承は公的なものだけに頼るのではなく、一人ひとりの「おれ」に関わってほしい

参考資料：ちやい復興実行委員会HP、FNNプライムオンライン(2023.9.2)、東京新聞(TOKYO Web)(2023.7.25)

### 大学院生の学び



吹き抜ける館内  
絵画、彫刻、写真、短歌など

### 大学院生の学び

我々院生は、研究活動の始めに先行研究を受け取る。良いセンサーを持ち、しっかりと受け取り、伝える研究をしたい。自分の家族の物語も、親から聞くことができるような自分でありたい。最後に、自分の体験の中に語り継ぐべきものがあるのなら、しっかりと後世に伝えていかなければならない。(武田明恵)

この実習を通じて話を聴くための姿勢や聴き手のあり方を振り返ることができました。また、聴けない状況や聴れない意味を考える大切さを学ぶことができました。そして、小さな声を大切にこれから知り続け、その声を伝えられる証人でありたいと考えました。(太田光美)



小林桐美氏の作品  
小高を象徴する、原発事故後に餓死した牛を和紙で表現した作品

### 大学院生の学び

社会人大学院生として  
・大きな物語の裏にある小さな物語の証人となり語り継ぐ。  
・フィールドワークの重要性と現地の声を伝え続ける。  
一物事を多面的に見るとともに、直接人と関わり様々な声を聴いて学ぼうとする人を増やす。(東知佐子)

プロジェクトに参加することで、震災や原発事故との距離がぐんと近くなり、自分ごととして考えるようになりました。見たこと、聞いたことを自分が暮らしている場所でも語り伝え、ともに考える人を増やし、行動したいと思います。自分ごとの種をまいていく作業でもあり、「証人」としての責任だと思えます。(河野曉子)

河野さんは2018年からこのプロジェクトに継続的に参加してきた。中でも震災と原発事故を伝承するミュージアムに関心を寄せている。福島県には原発事故を扱う施設や伝承のためのミュージアムがいくつも設置されてきた。今年のプロジェクでも、東日本大震災原子力災害伝承館、広島・長崎・ビキニ・福島伝言館、原子力災害考証館ふるさとなどを訪ねてきた。そのうちの一つ、「おれたちの伝承館」を紹介した。

「おれたちの伝承館」は、福島県南相馬市小高区に、2023年7月12日に設置された。館長は写真家の中筋純さん。小高駅近くの双葉旅館を中心に、中筋さんやボランティアの方々が空き倉庫の除染をし、2ヶ月で開館へこぎつけた。21名のアーティスト約80作品を常設展示している。「おれ」とは、福島県浜通りや全国各地で使われる性別を問わない一人称である。原発事故はすべての人にとっての問題であり、その伝承は公的なものだけに頼るのではなく、一人一人の「おれ」に関わってほしいという願いが込められている。

館内は吹き抜けで、絵画、彫刻、写真、短歌などの作品が展示されている。天井を見上げると、5m×7mの巨大な絵が飾られている。小高区では、原発事故後、酪農家が牛を残したまま避難せざるを得ず、残された牛が牛舎で餓死した。飢えた牛は牛舎の柱までかじって死んでおり、それを和紙で表現している。アート作品はとても力強い。作品を見て、これは何だろうと思ひ、解説を読み、そういう意味だったのかと理解する。もう一度作品をじっくり眺めると、さまざまな感情が湧いてくる。以前、ウクライナのチェルノブイリ博物館を訪ねたことがあるが、その中にも

アートを使った展示があった。福島でも個人的なミュージアムが次々に設置されてきていることで、より多声的になるだろう。

「おれたちの伝承館」へ行く途中、「道の駅なみえ」に寄った。そこには大堀相馬焼の商品があった。前日聞かせていただいた窯元の方々の商品で、実際に出会った方と商品がつながり、より心に残る体験だった。フィールドワークを行うと、点と点とがつながっていく感覚になる。

ここからは大学院生の学びについてである。毎年、大学院生は先輩たちの報告書をじっくりと読みながら事前学習を進める。初めて参加する大学院生も、先輩たちの学びの重なりの上に学んでいく。学びが地層のように重なり、それがまた受け継がれていく。

最後に、今年の実験生の学びが順番に述べられた。竹田さん「初めに受け取った先行研究に対して、良いセンサーを持ち、しっかりと受け取り、伝える研究をしたいと思った。自分の家族の物語も親から聞くことができるような自分でありたい。自分の中に語り継ぐべきものがあるならば、しっかりと残して後世に伝えていかなければならないとも思った」。太田さん「話を聞くための姿勢や聞き手のあり方を振り返った。語れない状況や語れない意味を考える大切さを学んだ。小さな声を大切に、これからも知り続け、その声を伝えられる証人でありたい」。東さん「大きな物語の裏にある小さな物語りの証人となり、語り継ぐことの意味、そしてフィールドワークの重要性を知った。普段は教員をしているが、自らの研究や仕事を通して、物事を多面的に捉え、直接人と関わり、様々な声を聞いて学ぼうとする人を増やすことに取り組みたいと思った」。河野さん「プロジェクト

に参加することで、震災や原発事故との距離が近くなり、自分事として考えるようになった。見たこと、聞いたことを、自分が暮らしている場所で語り伝え、共に考える人を増やし、行動したいと思う。自分事の種をまいていく作業でもあり、証人としての責任だと思っている」。

## 現地からの報告

### 眞手忍さん(青森県むつ児童相談所子ども相談課課長)

むつ児童相談所では、このプロジェクト以降、市町村支援の一環ということで、市町村職員の研修を実施しているが、そこでは、プロジェクトの支援者支援セミナーで積み重ねてきた「家族の強みを引き出す支援」を意識している。昨年度は2回の実施だったが、今年度は3回実施する計画で実施中である。そのためにはやはり、その家族に興味や関心を持って、家族のことを知ろうとする気持ちが大変なんだよと伝えている。そういったところを職員に定着させられるように、そして地域の支援者にそれが広がっていくような活動をしていけるように次年度以降も継続していきたい。団士郎先生の家族漫画展については、11年間継続させて頂き、会場の図書館が改修工事中で、規模を小さくして開催した。

### 斎藤清さん(宮古市企画部田老総合事務所 所長)ビデオレター

田老地区は、コロナの影響もあり、令和2年度、3年度はほとんど人の動きがない静かな街になってしまった。令和4年度から人の動きが戻ってきて、なんとか前の状況に近づ

いてきているように思う。この「道の駅たろう」は産直施設の売上が好調で、昨年度はおよそ1億円ちょっと切るぐらいということで、だいぶ売り上げも戻ってきた。この道の駅にあるドームは、立命館大学の皆さんのご協力により造られたもので、今も元気に活躍をしている。田老地区の人口は震災の前から見ると減少しているが、なんとか元気でやっているということを皆さんに知って頂きたく、頑張っている活動している。

### 佐々木純子さん(宮古観光文化交流会まなぶ防災ガイド)

震災から12年経ち、コロナもある程度落ち着いて、だんだんお客様が戻ってきて、修学旅行も戻ってきて、またいつもの1年になっているなと思う。ただ、エージェン트가減ったことで、前のような1年で何万人というのは難しいが、本当に来たくて来てくださっている方がすごく多くなっているのが実感としてわかる。そういう方と密に話ができる年齢になったのか、いろいろな話ができ、仕事が終わると、本当にこの方たちに出会えて良かったな、幸せだなと思えるようなお別れの仕方ができるようになった。

田老の町は14.7mの防潮堤で覆われて海は見えないけれど、海の恵みがあって生かされてきた町だから、漁師さんが住んで漁が行われている。今は天然昆布を収穫している。海は綺麗だよ、恵みもあるよ、でも災害があって恐ろしい津波がくる時があるから、しっかり逃げましょうということを伝えている。来た人が、三陸の海は津波の海だと思うのでなく、津波もあつたけれど、すごく綺麗な海なんだよとわかってほしい。

この道の駅ではみんな頑張っていて、サツ

パ祭り、笹の葉の形をしたサツパ船に物を乗せて売るサツパ市というのが年2回ある。あと、全国の気になるところから名物を取り寄せて各店で売るミニサツパ市。10月末のハロウィンでは、「タロウィン」というのをやっている。可愛い子ども達がおしゃれして、お菓子をもらいにみんな来る。あわび祭り、竹あわび祭りなど、少しずつ人が集まるようになってきた。まずはお客様をいっぱい集めて元気を頂いて、防災を発信していく。もう甘えてちゃいけないと思う。みんなからやってもらえる、来てもらうのではなく、ちゃんと来て頂く、それくらい魅力ある町にする。あそこに行かなきゃ食べられないもの、あの人に会いたいなって思える人になりたいなと思っている。そういう道の駅、街づくりをしたい。

立命館大学の皆さん、皆さんの先輩が作ってくださったあのジオラマ、すごく大事に、何回も壊れたところを直しながら修復して使わせてもらっている。いつかまた会える日を本当に楽しみに待っています。

#### 丸山隆さん(多賀城市教育委員会障害学習課副主幹)

12年という月日が過ぎ、図書館長の時に村本先生、団先生にお会いし、そこからのつながりで今日に至っている。震災を直接受けてはいるものの、やはり5年、10年、12年となると、もうまったく震災の時の話は通常はもう出なくなってしまったという状況がある。聞かれれば話すが、聞かれなければも話さないという状況の中で、立命館大学の皆さんが毎年来られて、当時のことを話す機会をくださっていることが、自分にとって語り継ぎさせてもらう機会になっていると思

う。そういうチャンスがなければ話す機会がないと思った時に、感謝以外の何物でもないというふうに感じている。

院生の皆さんに雑談風に話した翌日、鮮明に覚えていらっやって、話していることをすごく感じてくれているんだなと思って、大切なことをプロジェクトで学ばせてもらった。立命館の方たちが来てくれて、12年も続けていると言うと、みんなびっくりする。本当に驚いて感動する。今年は文化センターの改修工事等が入り、周辺もダメで、漫画展ができなかったが、来年は新しく裾野を広げた形でこのプロジェクトをつないでいきたいと思っている。

#### 小磯敦子さん(NPO法人白河市民活動支援会おひさま広場副代表)

白河の状況だが、白河城、小峰城というお城の崩れた石垣が復元され、昭和の時代からずっと開通を願われていた道が昨年開通した。ちょうどその一部が、唯一白河で、東日本大震災の時に亡くなられた方が出た場所だった。そこを通るたびにそのことを考えるが、そういう思いの人が他にもいるのかなとか思うと、やはり語り継ぐとか、発信していくとか、そういうことの大切さを今年は特に感じた。このプロジェクトをやって頂くことで、やはり誰かと誰かをつないだり、楽しい出会いをするのがすごくいい思い出になったりする。勉強の蓄積にもなるし、団先生の漫画展は、今年、一番いい形でできたと自負していて、来年以降もこの形で続けていきたいと思っている。

東日本大震災の時に福島県にいたが、ほとんど被害がなくて、今年初めて高校生と院生の皆さんに浪江から避難してきてくださ

った避難者の話を聞くというプロジェクトをした。利用者の中に避難してきた人があっても、あえては聞かない。話したいという時に話せる環境があればいいんじゃないかと勝手に思っていたが、今年初めてこの企画をやって、当時高校生だった方に「私、初めてこういう話をする場所をもらいました」と言われた。「話したかったかは自分でもわからない」と。その自分が受けた嫌な思いだったり、困ったことだったり、悲しかったことだったり、なんかもう表現できないいろいろなこと、誰かに言いたかったり聞いてほしかったり、訴えたかったりしたかもしれないけど、そのチャンスをもたらえてないというか、チャンスにめぐり会えてない人が、もしかしたら、たくさんいたのかもしれないと思った。

日常的にはさりげなく話を聞く機会はあるけど、細かなことまで聞くことはなく、それがいいことだと勝手に思っていた自分がいた。毎年立命館のみなさんが浜通りに行く時、ついて行きたいと思うが、実際県内にいる人がどれだけ行っているのかと思うと、自分も証人の一人となるために、誰かに伝えられる一人になるために、まだまだこういう活動をしなくてはいけなかったし、今までしてこなかったんだなということを改めて気づかせてもらった今年だった。

#### 青戸一樹さん(東日本大震災原子力災害伝承館常任研究員)

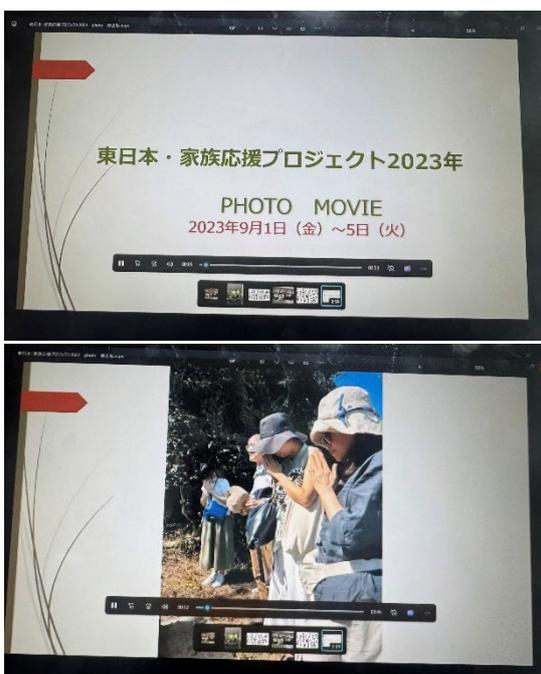
今回、小磯さんと一緒に白河の高校生・大学生が立命館大の院生の皆さんと一緒に、避難者の方々のモノにまつわる記憶をお聞かせいただくという取り組みをさせて頂いた。私は白河市でコミュニティカフェ EMANONという高校生を員するカフェ

を立ち上げて8年目になる。今の現役の高校生1年生というのが当時3、4歳で、今、福島県でも行政とか学校とかが、今の高校生が震災を知る最後の世代だというふうに盛んに言っている。高校生に関わる事業や研究をする立場の一人として、高校生にそういう期待を向ける意味というのは、思っている以上に複雑ということを経験していききたいし、引き続き考えていきたい。

今回参加した高校生たちは、たまたま高校生活の中で震災に関する活動に参加したことがある高校生だった。白河市では、日常生活において、とくに震災について学ばないと暮らしが成り立たないという状況ではない。浜通り、双葉郡以外の市町村でも多くの場合はそうで、浜通りの高校生でも日常的にそれを考えないと暮らしが送れないという状況にはなっていない。事前にいろんなプログラムに参加したことがあった高校生たちの参加動機は、純粋にその人の話が聞きたいというよりは、学校の先生に言われたからという場合もあるし、東日本大震災とか防災に関する活動をすることが、自分の自己効力感を上げることになりそうとか、自分の進路キャリアを考える時に、そういう経験を今、しておくことがなんとなく良さそうとか、ある種利己的な理由で参加したこともあるかもしれないし、周りが参加しているからということで特段意識せず参加した高校生もいたと思う。

地元福島県内の次の世代が、この問題を捉えなければ、この国の中で誰が捉えてくれるのか、諦めずに粘り強く考えて伝承ができるのかということ、当時3、4歳くらいで知っているけども、具体的にはあまりわからないというような子どもたちがやはり考えなければ

ばいけないという状況はある。一方で自分にとってそれがどんな意味があるのかということを考える余地、余白がないまま、皆さん伝承するべきなので、一緒に考えましょう、参加してくださいという形で話を大人側から子どもに振っていくことで、子どもとしてはそれをどう受けとめていいのかわからない、そういうふうには振られるんだったら、むしろ受けとめたくない、それは私としては背負えないというような受けとめも出てくるのかなというふうに感じている。何か答えがあって、今こうやってお話ししているわけではないが、当事者の福島の高校生が、教育旅行として伝承館に訪問した時にどう思ったのかとか、どんな感情が生まれてきて、この取り組みをした後にどのように自分は考えたのか、そういうところをまず大人として受けとめたいし、そのことをベースにまたこれからどのように次世代と関わっていくのがいいのかを一緒に考えたいと思う。



## 第二部 語り継ぐために

～聴く・編む・手渡す～

### 高校生たちの活動報告

第二部は、院生の太田さんと東さんの司会で、「語り継ぐために～聞く・編む・手渡す」というタイトルでの報告だった。

「本プロジェクトは、被災と復興の証人になることを目的とし、震災後12年間継続してきました。私たちは、歴史を客観的事実としてよりも、一人一人の人生の物語として理解したいという本プロジェクトの思いを受け取りました。編むとは、互い違いに組み合わせるひとつの形に創り上げること。聞かせていただいた話に聞き手の思いも編み込み、次世代へ語り継いでいきたいと考えます。今日ここからのお時間は、聞き、そしてこの場を一緒にしている皆様と編んで、さらに次世代へと手渡すことを意識したプログラムとなります」ということで、まずは、自由の森学園高等学校選択講座「東北と復興」メンバーの高校生と社会科教諭内田一樹さんからの報告である。

#### 内田一樹さん(自由の森学園高等学校社会科教諭)

自由の森学園は埼玉県飯能市にある緑豊かな高校で、「東北と復興」は昨年度から立ち上がった企画で、昨年も報告させてもらった。私は2015年に立命館大学の修士課程にいる時に、増田先生が担当されていた石巻を訪れ、そのご縁もあって石巻を中心にスタディツアーということで講座をさせてもらっている。毎週火曜日の5・6限の1時40分から3時10分の90分授業で、1年間通して高校1年生から3年生を対象に行っている。

今年度は、高1から高3まで合わせて21人が登録してくれて、前期は石巻、後期は福島について学んでいこうと思っている。

## 高校生報告

1日目、7月20日の活動報告。まず石巻博物館を訪れた。石巻博物館は、歴史、民俗、考古、美術の各分野の所蔵資料を中心にそれぞれの調査・研究を進めている。石巻の街はとても綺麗で昔を感じるような風景だったが、博物館を訪れることで石巻の歴史に触れることができた。また、他の講座で学んだアイヌ民族とのつながりも再び学習することができ、違う視点から考えることで新たな発見があった。

続いて雄勝に行ってきた。雄勝では小島漁港を訪れた。銀鮭や帆立、牡蠣、ホヤの養殖を行っている。船で実際に養殖現場まで行き、帆立の養殖を見せてもらった。漁港の入り口に設置されている防波堤の高さがとても高くてめっちゃめっちゃ驚いた。地震や津波が実際に起きた際には自動で防波堤の扉が閉まるということを聞いて、津波対策もしっかりとされているんだなということを感じた。津波があったことを感じさせないくらいに穏やかな海だった。処理水の問題について漁師さんに尋ねたところ、「私たちが騒いでも大ごとになってしまうだけ」とおっしゃっていて、本当に思っていることを言葉にできないのはすごく苦しいことだなと感じた。

一日目はモリウミアスというところに宿泊した。森と海に囲まれた雄勝町に築百年余の桑浜小学校があり、2002年閉校となった。東日本大震災によって町の8割が壊滅してしまった地域の復興への想いから、もう一度学び舎として再生するため

に、MORIUMIUSが作られた。ご飯がとても美味しく、漁港で見せてもらったホヤや銀鮭も食べ、雄勝の食の豊かさを感じることができた。また星がとてもきれいに見えた。お風呂はすべて手作りで、スタッフさんとボランティアの方々が作ったそう。

二日目は雄勝病院、大川小学校、門脇小学校、そしてMEET門脇を訪ねた。たくさんの命が犠牲になり「亡くなったいのちで伝える」大川小学校、そして地震・津波・火災に見舞われながらも一人の犠牲も出さなかった「助かったいのちで伝える」門脇小学校にフォーカスする。児童74人が犠牲になった大川小学校では、当時小学六年生の娘さんを亡くされた佐藤利郎さんのガイドのもと、敷地全体を見て回った。普段の学校のこと、震災当時の学校のこと、そして娘さんを迎へに行ったときのことを、佐藤さんは時々冗談を交えながら、慣れた口調で淡々と話された。想像もつかないような葛藤をされてきたであろう佐藤さんの「一生目を逸らさない」という言葉は、話を聞いた瞬間から今の今まで、重く心に響き続けている。被災者でありながら、震災と娘の死に真正面から向き合ってきた佐藤さんの言葉と想いを、私たちがどういった距離感で受け止め、受け継ぐべきなのか。被災者の方一人一人にとっての復興や向き合い方はそれぞれであり、私たちは当事者ではないが、他人事にしてもダメで、どう未来につなげていくか、伝承をキーワードに考えていきたい。

門脇小学校では学校の中を見て回り、たくさんの展示物を見た。偶然、当時の校長先生とお会いし、当時の学校の避難の様子もお聞きした。その中で心に残ったことは、避難の連鎖だった。門脇小学校は普段行ってい

た避難訓練のおかげで、子どもたちが率先して避難をしたそうだ。そんな子どもたちに続き、地域の方も保護者の方も避難をした。避難訓練は地域も救うということが印象的だった。最後に「がんばろう石巻」の看板の前で集合写真を撮り、二日目を終えた。

3日目は午前には雄勝法院神楽保存会のお話を伺った。雄勝法院神楽は、石巻市雄勝町に伝わる民俗舞踊で、600年の歴史があり、無形民俗文化財に指定されている。雄勝町では160名が亡くなり、71名が行方不明になり、保存会の会長も亡くなり、道具のほぼ百パーセントが流出した。そんな中で例祭を通常通り行っていいのかという葛藤があったが、被災者から神楽が見たいという依頼があり、残った道具と借り物で、5月28日雄勝復興市で神楽を奉納した。その後、国からの支援、公演の機会や道具伝承者などにも恵まれ、雄勝町のものとしての雄勝法印神楽が再び引き継がれた。

こども無限カンパニーさんは、東日本大震災当時、代表の田中雅子さんが緊急支援に訪れ、炊き出しを行っている時、子どもの遊び場がないことに気づき、2011年6月に臨時の遊び場を作ったことが起源となり、活動を開始した。現在は、子どもの笑顔が地域の中で育てられる街をモットーに、フリースクールやプレイパークの運営を行っている。

NPO法人Relaさんは石巻市周辺で活動している移動支援の団体。石巻市では交通機関が整っていない地域が多くあり、地域の人たちの移動支援を行っている。孤立している人たち、特に高齢者を中心にお出かけ支援も行っている。仮設住宅から復興住宅に移り住み、新しい人間関係に馴染めず孤立している高齢者がたくさんいて、孤立を防ぐと

いう活動も裏にある。

NPO法人の抱える問題は共通して資金不足による経営難が挙げられる。Relaさんの移動支援は、行政の認可が下りていないことから、ガソリン代しか利用料金を実施することができていない。こども無限カンパニーさんのフリースクールは助成金が下りないため、経営は赤字になっている。このような支援は、本来、国が実践してやるのが大切なのではないかと考えた。

最終日である7月23日の午前中は、石巻市にある上品の郷を訪れた。上品の郷は平成17年にオープンし、道の駅グランプリ2位になったそうだ。

午後は石巻を離れ、仙台メディアテークを訪れた。その中にある「3月11日を忘れないためにセンター」、通称「わすれん！」は、東日本大震災に向き合い、共に考えるための施設で、映像、写真、音声、文章など、どんな立場の人でも記録し、保存できる。今まで学んできたものより日常が記録されていると感じ、様々な視点から考えたり、撮ったものが記録されており、ひとつの物事をたくさんの視点で感じる事ができた。

モリウミアスの海鮮丼はすごく美味しかった。現地の人のお話を聞いたり、たくさんの施設に見学させてもらい、最初の授業では、みんなで振り返りをした。今回学んだことを日常生活にどう受けとめればいいのか、東京の街並みを見た時に石巻に比べると別の世界に見えた、時代が進んでない石巻だけは何か昭和っぽく感じるという意見もあった。今回のツアーでは、いろんな体験をさせてもらい、とても良い4日間だった。ツアーが終わっても、私たちの学びは続く。

### 青砥和希さんから白河市の高校生の活動

福島県白河市で高校生最前線のコミュニティカフェEMANONを運営している。高校生たちが試験なので、立命館大学の皆様と先日取り組んだ「震災の記憶を聞き書きする」という取り組みについて代理で紹介する。

白河市は福島県中通りの南部にあり、人口5万人くらい。市内には3つの全日制高校があるが、高等教育機関がないため、大学に進学する場合、地元にいるのが最後の年間になる。その時期に地元の中で居場所を感じたり、つながりを作ったり、地域について知ったりするというラストチャンスということで、このような活動を始めた。高校生は利用無料で時間制限なしで使うことができるということで、高校生をとにかく最前線するという仕組みを作って、行政との共同事業でカフェを運営している。

簡単に機能の説明をすると、まずは、ありのままの自分でいられることを家庭と学校以外の空間で提供したいということで、居場所の機能を提供している。同時に、学校や家ではなかなかできない取り組みやきっかけ作りということで、活動拠点としていろいろな活動を支援、提案をしている。また、社会関係の橋渡し、高校生と学校の先生、保護者以外の地域の大人をつなげる機能ということも取り組んでいる。高校生が「この町、居心地がいいな」とか、「ここはありのままの自分を受け入れてくれる人がいるな」というふうに感じてもらうのがゴール、あるいは出発点かなと思っている。

福島県は、自治体も震災のことを調べたり発信したりしてほしいという強い期待を高校生や高校の先生に向けているという現状があり、震災に関して勉強をしたり、県外に発

信したりという取り組みをすると予算がついてくる。そういう制度あることそのものはすごくいいことかなというふうに思っている。

今回は、「震災の記憶を聞き書きする」ということで、カフェEMANONに集まっている高校生に声をかけて、参加してもらった。浪江町から白河市周辺に避難されている方を囲んで、白河の高校生と立命館の院生の皆さんでお話を聞いた。お話を聞くにあたって、「あなたの人生全てを教えてください」とか「震災について喋ってください」という形ではなく、「今回皆さんが震災について思い出す、あるいは震災にまつわる記憶や思い出があるものを3つ持ってきてください」というリクエストをした。たとえば、Aさんは2本の鍬を持ってきて、高校生と院生の皆さんでお話してくれた。この形にしたのはいくつかの理由があるが、ひとつには、このAさんは最たる例かと思うが、度々、マスメディアの取材で、「震災について喋ってほしい」とか、「今の気持ちを聞かしてほしい」とかいうインタビューを無数に受けてこられたことを知っている。12年経った中で、これまで何度も何度も語ってきた話で、その場にしか生まれない関係性が生まれづらいのではないかと考えた。

高校生は素直なので、震災について教えてくださいという風に質問を作ってくれる。目の前にいる方と質問者の間で、その場にしか生まれない関係性や、その場の組み合わせだから聞かせていただけの話、そういったことに意味があるのではないかなと考えた。事前にLINEや口頭で、こういう感じで当日集まってほしいということをお伝えした。避難や震災について思い出して考えたりする上で欠かせないものについて当日はお話を

聞きたい、そしてそのものがどんなものなのかということをお願いということで、話し手と聞き手の間で共通点を見つけたり、聞き手が想像力を持つことを目指した。

参考にした取り組みとして、福島県立博物館が行っている震災遺産を考えるという企画展がある。震災遺産と学芸員の方が名付けているが、震災をめぐるものを収集保存し、それを展示する企画展である。モノや記憶をどのように残していくのか問いかける対話型鑑賞も、この企画展とあわせて学芸員の方が取り組んでおり、すごくいいなと思っている。震災について学びましょうという声かけよりも、まずモノが私たちの目の前に現れて、これがどんな意味があるのかをみんなで考える。そういうことで、従来は震災について興味がない、あるいは学校で勉強しなさいと言われるからやらされ感があって、あんまり興味が持てないという高校生でも、こういう切り口なら、自分の地元で起こっていた、あるいは自分の立場でも起こったかもしれない震災について想像力を持っていくことができるのではないかと思った。

事前に高校生とで学芸員の方のお話を聞いた後、高校生からこの取り組みについてどう思うか意見交換の場も作った上で、当日のインタビューに臨んだ。

まずは4つのグループに分かれてお話を聞いた後に、それぞれのグループでどんな話をしたかというのを全体共有するという流れだった。この取り組みの後、高校生たちに持ってきて頂いた3つのものを紹介するテキストをまとめてほしいというふうをお願いをしてまとめてきてもらった。まとめるにあたって、まずそのモノの名前、説明文、お話のなかでいただいた方の中のお話の中で最

も印象に残った一言。この3つを選んでテキストに書き起こしてもらうことにした。いづらか紹介する。



たとえば、Aさんのひとつ目はスズメバチ用Tシャツ。Aさんは震災後7月に避難して町営住宅に住んでいた。高校を卒業してからすぐ窯を継いだ。震災後、生まれて初めて草刈りの臨時職員の面接を受けた。その時に買ったTシャツだった。スズメバチに刺されにくい色である白色のシャツで、奥様が買ってきた。今も袖を通すたび、震災前を思い出し、自分が今なぜここにいるのか、虚しくなることがあると語った。2つ目のものは、避難先で始めた家庭菜園で使っていた鍬。「避難先の新しい家で何もしないことと、東電への憤りに限界を感じたさんは家庭菜園を始めた。その際使っていたのがこの鍬だそう。一振りするたび、この野郎、この野郎と、東電へのやり場のない怒りが込められた。今でも家庭菜園は続けており、奥様がその野菜を調理しているそう。Aさんは、「いつか東電へ合法的に一泡吹かせたい」とも語った。それが今生きる、今、焼き物を続ける生きがいであると語った。3つ目は、避難前の家の裏の川で息子と魚取りとかしていたが、かなごう石(製鉄の際に出るくず石)が川によく転

がっていて、焼き物作りの際には釉薬や模様付けなどに用いられる。震災当時、Aさんの息子は中国にいたが、電話で震災の報告を受け、もう故郷には戻れないと言われた。この石は、Aさんと息子にとって故郷の形見である。

Bさんが持ってきてくれたものは、避難所できょうだいで読み回した漫画。初めての避難で何を持っていけばいいかもわからなかったNさんだったが、きょうだいが当時好きだった漫画十巻を車に積み込んだ。すぐに変えられると思っていたので「そんなものいらないよ」と言ったが、実際の避難所生活は何もすることがなく、漫画を兄弟と回し読み読み回し日々を過ごしていたそうだ。それから何気なくつけ始めた避難生活日記、連絡用携帯。友人とはミクシィを使って連絡を取り合い、避難中、知り合いや家族との連絡用として使っていた。それから震災後の生活を支えてくれた電子レンジの写真。避難後の支援物資として日本赤十字社から届いた電子レンジで、3日前(2023年8月31日)、最後に人参を温めた後、扉が開かなくなり壊れてしまった。かれこれ12年以上、被災後の生活を支えてくれていた。

Cさんは、みんなが一年生の写真。父が「お金で買えないものを持ってきた」とアルバムなどを重点的に持ち帰ってきたうちのひとつ。年の差でみんな一年生のタイミングで撮った写真で、祖父がその年に亡くなってしまったこともあり、最初で最後の家族写真となった。

Dさんは肌身離さず持っていた携帯電話。震災直後、電波が入らない状況に陥り、ほとんど情報が得られなかったが、携帯電話や財布など最低限のものを持参して近くの体

育館へ避難した。翌日の夕方、ようやく携帯電話がつながるようになり、「原発が爆発したらしいよ」と聞いた。初めて今回の事態を判断した瞬間だったから、当時の自分にとって、判断する際の重要なツールとなった。それから、息子さんが使っていたプラスチックの硯。Dさんは最初、東京に避難したが、子どもが福島から来たということで見られるのではないかと心配した。しかし、近所の小学生が遊びに来てくれた姿を見てひと安心した。その後、白河に引っ越し、小学校を行った際、同級生が自分の子どもを鼓舞するように応援している姿を目にした。Dさんはこの硯を見ると、行く先々での人たちに本当に恵まれたと思い出し、今でも相馬焼の絵付けを実演する際に出会った人と何らかの縁で繋がっていたと必ず自賛している。それから、今は亡き父が描いた九匹の馬の絵。父の残した馬の絵を次の代に残したい。Dさんの父はかまどでは珍しい自分の手で馬の絵を描く人だったが、20年以上前に病に倒れた。父の闘病中に自分が馬の絵を描いてしまうと、父自身が長くないと感じるのではないかと思い、しばらく描けなかったが、父は震災の3年前に亡くなってしまった。震災後、馬の絵を描いてほしいという依頼をもらい、描けるかと心配したが、不思議とうまく描けた。Dさんは、その経験を通して、父の馬の絵を次世代にも残したいと地元から持ち出した。



以上のような話を高校生と立命館大の院生の皆さんで聞かせて頂いた。昨日の振り返りは時間が限られていたが、高校生の感想で多かったのは、「避難についてはテレビで知っていたが、実際に話を聞いてみるとそれ以上の情報があって、知らなかったことをお伺いすることができた」「あの避難って大変っていうイメージがあるけども、お話しする姿は重々しくもなく楽しかったこともあったというような明るい語り口で語っていらっしやっ。だからこそ壮絶な避難生活が伝わってきて、そのギャップを直接お話しすることで感じた」「福島を巡る報道について、福島の印象が悪くなってしまうのではと普段メディアを見ていて思ってしまうこともある」などの感想があった。

## 民話の語りと次世代へのメッセージ

### 大平悦子さん(岩手県遠野市日本民話の会会員)

私は岩手県遠野市の出身で、遠野言葉で民話を語る語り部、今は神奈川県川崎市と遠野2地域に住んで、行ったり来たりしながら活動を続けている。あの2011年の東日本大震災の後、民話の中に津波にまつわる話

があることを知って、それを語りながら自分が見たり聞いたりした範囲で被災地の様子を伝える活動もしてきた。たとえば、今年の2月には、千葉県の丸山公民館というところで、被災地が抱える問題の一つ、人口減少について語った。こうした活動を続けていくうちに、私は民話の中には津波だけではない様々な災害にまつわる話がたくさんあることに改めて気づいた。

ひとつには水害の話、それから野生動物の被害の話、飢饉の話など。水害の話では、洪水を防ぐために人柱を立てたという話がいくつもある。野生動物の被害の話では、何と言ってもオオカミの話が多い。遠野物語38番の話は、ある農家がオオカミに襲われて七頭もの馬が殺されてしまうという話。そして飢饉の話。岩手は東北にあって寒い地域なので、かつて度々、冷害による飢饉に襲われた。悲惨な様子やそれを乗り越えていく話などがいくつも残っている。

今日は、飢饉にまつわる「ヘビノタイモジ」という話を聞いてください。『民話と文学』17号に古い資料にこんなのがありましたよと紹介されていたお話。「ヘビノタイモジ」というのは毒のある植物の名前で、マムシグサのことを言うんだそう。

「聞いておくれ」と始まったお話は、天保の飢饉の時の話で、食べるものもすっかりなくなった。こうして子どもたちがお腹をすかせて死んでしまうぐらいなら、いっそのこと毒でも何でもいいから、せめて最後に腹いっぱい食べさせてから死なせたいとの親心で、父と母は山へ行って「ヘビノタイモジ」の芋を掘ってきた。「芋があるから、鍋で茹でて食っていいぞ。喧嘩しないよう、仲良く輪切りして食えよ」と言うと、子どもたちは大喜びし

た。その喜ぶ子どもたちの顔を「ああ、これ最後の見納めだ」と思いながら、見ていられず、「また山に行ってくる」と出て言った。

子どもたちは早く食べたくて、「まだかまだか」とつついているうちに、灰が鍋にたくさん入ってしまった。ようやく芋が柔らかくなって、子どもたちは「うめえ、うめえ」と腹いっぱい食った。親たちがおそろおそろ帰ってくると、子どもたちがはしゃいでいる。実は、「ハビノタイモジ」の毒は灰で消されたのだった。その後、親たちは、「助けられた命、何としても生きなければ」と踏ん張って生きたと。

民話というのは、普通の人々の暮らしの歴史で、ご先祖様が私たちに残してくれた宝物だと思う。だから、どうか皆さんも、昔話、民話に関心を持っていただいて、後世に伝えるということにも関心を持って頂けたらありがたく嬉しいと思う。

### 萱場裕子さん(宮城県山元町やまもと民話の会会員)

庄司アイさんの娘さんである萱場裕子さんから、やまもと民話の会で編集した『巨大津波』の裏話が紹介された。

何もかも流されてパソコンもない。ただ、母はワープロを持っていて、それで自分ですっと打ち込んでいた。聞く方も同じ体験をしてしまうので、話を聞いて帰ってくると、もう3日ぐらい寝込むような状態だった。相当疲れてるなと思って、私は55歳で早期退職して、ワープロぐらいだったらできるよということで手伝い始めた。

本来ならボイスレコーダーなどで録音してから文字起こしするのが通常だが、とにかく聞くのに徹して、家に帰って思い起こして、

広告の裏みたいなのに、ダーツと書いて文字にした。母は字は上手な方だったけれど、娘でもちょっと読みにくいような、みっちり書いてあるのを渡される。それを今度は私が打ち込む。大変な作業だった。全部自分でまず一回書くんだから。

はっきり言って、復興していかなければならない時に、高齢の方たち、母も78ぐらい、そういう人たちがなぜそんなにひどい思いをしながらやっているのか不思議なぐらい、パワフルだった。

今、考えてみれば、そういう形で津波の記録を残すそのために、10年ぐらいの母の寿命だったのかもしれないと思う。それがどんな風な形で、後世に伝わっていくのかはわからないけれど。

私の家族も同じように被災していて大変な思いをしているからこそ聞けるのかもしれない。「大変だったね」というところから、私もこうだった、ああだったんだと話し始めるのではないかと思う。ですから、文字に残っている以外のいろんな会話が行間にあるのだろう。

母は、「自分には何もなくなったけど、民話だけは残った」と思ったぐらい民話が好きだった。だからこそ語り継がれる民話が生まれてくる。

### 寺島重子さん(宮城県山元町やまもと民話の会会員)

次に、寺島重子さんがやまもと町の伝説「下田沼の大蛇」のお話をしてくれた。

山元町坂元に下田沼という美しい沼があり、それを見下ろせる「御狩屋崎」という丘の上に立派なお寺があった。この寺には、器量もいいしお経を唱えるのも上手、人柄もいい、

笛の達人の若い和尚が住んでいた。その笛の音は御狩屋崎いっぱい響くので、そこを通る人たちは本当に心打たれた。ある夏の美しい月の美しい晩、滝の山の松に月がかかって、その景色が静かな沼に映るんだと。若和尚さんも、その景色に見とれて笛を吹いていた。笛の調べに引き寄せられたのか、美しい姫が現われた。それから月の美しい夜にはいつも姫が通ってきて、楽しい時を過ごすようになる。

やがて二人は深い仲になり、赤ん坊が生まれたが、大蛇の姿だった。実は、姫は下田沼の主の大蛇だった。間もなく、子を抱いたまま姫は下田沼に身を隠してしまった。残された若和尚は大層な悲しみで、何も手につかず毎日ぼんやり過ごしていた。ある夜、突然大蛇が現れて和尚を殺してしまった。その場所には和尚さんのお墓が祀られ、「和尚壇」と呼ばれるようになった。そのうち、寺は無くなってしまったという。

夢中で喋りましたが、その後どうなったのかわからない不思議なお話だった。

#### 長正さつきさん(みやぎ民話の会会員)

長正さつきさんは飯舘村のキツネの話。今はキツネいなくなったんだけど、テツコさんがキツネにばかされた話をいっぱい載せてるのだけど、自分自身の話をあんまり語ったことはない。私も飯舘生まれで、飯舘育ち、家も山の中であって、町までは自転車で7、8分。

明日遠足という日に、何か買ってこようと思いつきながら、友達と喋って何も買わないで帰ってしまった。いなり寿司作ってもらうのに油揚げを買うのを忘れたと思った。でも、町の方に行くと、友達に何か言われたらいやだ

など、今度は山道を通っていく遠い方に行った。そこまでは自転車で10分ぐらい。バスの停留所があって、そこもお店があった。「行ってくるからね」と親には言って。

油揚げは停留所のところのお店で買った。ずっと行くと、ちょっと小高いところがあって、ちょっと気持ち悪い。そこに来たら、急に自転車が走らなくなって、ペダルも動かないでグググと。どうしても。そこを何度も通っているのに不思議だった。母が迎えに来て、「サッコかーっ」と呼び、「かあちゃん」と言った途端に自転車がクルクル動き始めた。本当に不思議。それ、絶対キツネだぞ。本当に。だからキツネの話を知ると、自分も経験してるので、本当だな、嘘の話じゃないと思う。テツコさんの話にもキツネがいつもいっぱいいるところがある。どこにでもそういうところがある。

飯舘村もぼちぼちと戻る人はいるが、3分の1弱ぐらい。むしろ、空いている土地を使って何か作ってみようかという若い人がちらほら村の人になっているようだけど。本当に閑散としているが、公共的な建物などは、ほとんどの作り変えられたりして、何となく新しい村という感じがする反面、新しい人が入ってきて、人間的な付き合いは薄らいでいる部分もある。それでも、今までのように農業をする方はほとんどおられないようだ。

ご主人の方は帰りたいと何度も通って、リフォームもしたけれども、最終的には高齢者2人が住んでいたら、子どもたちに迷惑をかけることになるから思い留まって帰れない。そういう選択をせざるを得なかったと。同じような思いの人は他にもいるだろう。住み慣れたところで自分の一生を終わりたいが、や

はり若い人についていかないと狭いところに同居してるために、いざこざがあったりというような方がある。要するにお医者さんとかが身近にないってこと。そうなるとやはり自分の家があっても帰れないという人がほとんどだと思う。

### 瀬尾夏実さん(アーティスト/一般社団法人 NOOK)

私は東日本大震災の時に大学生で、美術の勉強をしていて、大学院に上がるタイミングだった。震災が起きて、いろんなニュースが飛び交う中で、自分にできることは何だろう、表現、アートにできることは何だろうと考えるようになり、ボランティアに行った。

ボランティアに行った先で、さまざまなお話を聞かせていただく機会が多かった。ボランティアといっても、力仕事得意なわけでもなく、何かすごくできるわけでもないのに、「わざわざ来てくれてありがとう」と、被災をした方たちが体験を語って伝えようとしてくれる。語らずにはおれない体験をした人というのは、必ず「次の人に伝えてね」とおっしゃったりする。それを聞かせてもらった時に、まず私はこれを覚えておいて、誰かに伝えることをやるべきだろうと思った。どうやったら自分にそれができようと考えながら、12年いろいろやってきた。

映像作家の小森はるかさんとは大学の同級生で、一緒に作品を作ったり、2012年から3年間、岩手県の陸前高田に住みながら、お話を聞いて、書いて、一緒に作品を作ったりしていた。体験をした場所とか、現地というものと、体験をしていない、違う場所であると感じている人たち、その間を行き来してつないでいくような媒介になるというのが

自分たちのやることだと思った。体験者、現地にいる人たちは、語らずにはおれないことがある。語るということは癒しでもあるので、そういう意味で語らなければいけないということもあるし、自分の貴重な体験は未来の人にとっても貴重な体験であるということを理解されていて、それを話さなければいけないと思っていらっしゃる。そういう体験を持つ人たちに会いに行って、お話を聞いて、伝えていく。

まず現場というか、人に出会ったり、風景に出会ったりするということがあった。そこで出会ったものをどうやって伝えていくかというときに、何かしらの形で記録・記述していくことを自然に始めた。私の場合は絵を描いたり、小森さんなら映像を撮ったり。体験をした人たちと一緒に協力して映像作品を作ったりということも含めて記録してきた。今度はそれを伝えるということで、いろんな場所で展覧会をして発表していく。たとえば神戸に展覧会を持っていくと、神戸で阪神・淡路の震災の経験をした人や、経験はしなかったけれども、そこで生まれて育った人たちが自分たちの話をし始めたり、遠い場所と体験がつながって、ちょっと違う形の連帯感が生まれたりということがあった。そうして別の場所に運んでいくと、また新たな出会いが生まれるので、そこでまた語りを聞く、そういう循環でずっと活動を続けてきた。

ひとつだけプロジェクトを紹介すると、2018年に、「二重のまち/交代地のうたを編む」という作品作りをした。陸前高田では、津波でなくなった場所にかさ上げ工事をして、その上に新しい町ができてというプロセスを踏んできたが、工事をしている時は、被災した人たちが仮設住宅で体験を語るなどの場

があったが、街ができると震災の体験を語ることは日常的にはなくなってくる。反対に、被災地ではないとされる関東とか関西とかに行くと、震災当時子どもだった年代の人たちが、あの時はまだ子どもで何もできなかったけど、今なら何かやりたい、被災地に行ってみたいという人たちがどんどん育っていた。

語る場が減ってきた被災の現場と、外で成長してきて、今聞き手になりたいと思っている人たちが出会う場所を作れば、それはシンプルに体験の継承の場になると考えた。公募をして、4人の旅人を陸前高田に招き、15日間のワークショップをして、みんなで一人で話を聞く、聞いた話を仲間内で語り合う。そして、カメラを向けて記録をするように語り直しをする。そしてみんなで振り返るといようなプロセスのワークショップをした。

外から来た彼らには、最初は自分がここにいて良いのかとか、自分に聞く資格があるのかとか、あるいは自分は何が聞いているのかわからないとか、そういう不安や葛藤がある。それを自分なりに語ってみたい、語ってもいいんだと思うまでのプロセスですごく重要だなと思ったのは、聞き手である彼ら自身が励まされる、彼ら自身の存在が尊重される、それを体験していくことだと感じた。「今、あなただから話すんだよ」とか、「今、聞きに来てくれてありがとうね」と声を掛けられながら、「あ、自分がここにいていいんだ」と思ったり、「これを誰かに伝えてね」と励まされたりして、彼らは、すべてはわからないけれど、受け取れたものは語ってみたいというステップに進んでいく。

被災をした人に聞くと、彼ら自身の一対一のやりとりでもそういうことが起こるし、あ

るいは、仲間内で励まし合ったりしながら、自分自身はここにいたいんだとか、自分はこの経緯を、背景を持っているから、こういうふうに語るんだということを整理していく時間が彼らの励みになる。

思い出すのが山元町の庄司アイさんが民話について話してくださった時に、民話というのは愛なんだよと話をされていて、どういう意味で語られたか、細かいところはわからないけれど、語り手と聞き手、子どもさんやお孫さんに対して、語り手は聞き手のことを尊重して、「あなたに語ってるんだよ」ってことをすごく大切にしながら語っていて、聞く人はそうやって、身近におばあちゃんとかおじいちゃんの皮膚感覚とか匂いとかを感じながら、今受け渡されてるんだとか、自分がここにいていいんだ、いなきゃいけないんだってことも含めて、語りを受け取るということがあるんだろうと思った。そういうことが、震災経験を語り継ぐときにも、語る人が重要なんだけど、聞く人の存在が大事にされることが必要なんだと感じている。そうやって15日間のプロセスを記録して、「二重のまち/交代地のうたを編む」という映画ができて、展覧会をやって全国を回っている。



「二重のまち/交代地のうたを編む」

<https://www.kotaichi.com/>

### 加藤恵子さん(みやぎ民話の会会員)

ちょっとここ数カ月体調を崩して、9月に皆さんがおいでになる時にお会いできなくて、とても残念に思っていた。なんとか今日は体調を戻してお話できて嬉しい。私は、今、瀬尾さんがおっしゃった、この震災を通して、絶対出会わなかった人たちとたくさん出会い、そしてすごく親しくなった。村本さんがおっしゃっていた「証人になる」ということで語りた、語る人に寄り添うということをやってきた東日本・家族応援の皆さんとも近づけた。

一番最初出会ったのは、立命館大学の鶴野先生だった。笠地蔵の授業を八本松小学校で私が語っている時、鶴野先生を学生と間違っ、授業見た方がいいんじゃないかなと、よく聞きもしないで誘ったのが最初で、帰りの車の中でみやぎ民話の会のこと、そしてそれを立ち上げた小野和子さんのことをずっと話した記憶がある。

小野和子さんがやってきた、人に寄り添って聴くことの大切さというものを、震災の後、真剣に考えるようになった。「たくさんの人たちと出会って、ただ同じように語っても、ちゃんと聞いてくれない人には、話はすーっと抜けていくんだよ」と小野先生はおっしゃる。

アイさんのお嬢さんが、震災にあった人たちの話を聞くと、それをノートに書いて、夜になると、もう次の日から三日ぐらい疲れたと寝込むのだとおっしゃっていたが、小野先生はいつも車の中で「あなたたちは疲れないわよね」と、「一人の方の語りを聞いていると、もう私はぐったりして疲れるのに、あなたたちは元気よね」という意味が全然わからないでいた。でも、震災後、人に寄り添って

語りを聞くという、寄り添うとはどういうことなのか、語りを聞くとはどういうことなのかをすごく考えるようになった。

津軽、福島、山形と、小野和子さんについて回って語りを聞くというのを体験して、それを今度はテープから起こして文字にする、その作業は私にはとても勉強になった。1回会ったら話が聞けるわけではないということを使う。

その中でも、今ではすごく親しい親友みたいになったのが、双葉町で被災して、今はひたちなかにお住まいの目黒トミ子さん。目黒さんは、庄司アイさんと同じように、ご自分の身近にいた双葉町の人が仙台に避難してきた話を何も持たず、とにかくひたすら聞いて、うちに帰ってきてからそれを文字に起こして本を作った。目黒さんとはみやぎ民話の会で最初に始めた「ゆうわ座」のオープニングの時に初めてお会いした。自分は双葉町で被災して、福島の子どもの将来のために、どうしても自分のことをお話ししたいと初めて出会ったその場で話をして、小野さんやみやぎ民話の会と出会ったという経緯だった。

もう一人、出会いがあって、私が書いた北上町にある女川というところの女川口説きに出てくる秘伝物語みたいなものを調べている間に会った佐々木ゆうこさんという方。女川口説きの話を聞いていると、だんだん彼女は北上町の吉浜というところに住んでいて、そこは全部流されてしまったということ最近になって聞いた。何年も会っていたのにその話は全然しないで、女川口説きの話ばかりしていた。その彼女が今日も電話をくれて、土地にまつわる話をしてくれた。

そんなふうに、この震災で新たな方たちの出会いがあって、聞くチャンスをもたらえた。そしてそれは心と心を寄せて聞くということを体験させてもらった大事な年間だったというふうに思う。

今日は高校生たちの白河の話、被災した方が3つのモノを持ってきて、それに関わる話を聞いたという話だった。被災はどうでしたかと聞くと話せないが、持ってきたモノから原子力発電所に対する怒りが、直接その話を聞くよりかえって伝わる。突然のことで逃げ惑って、どうしたらよいか、何を持っていったいいかわからなかったという話、当時の彼女たちの被災地での暮らしが類推できるし、周囲の人に恵まれた感謝など、それを高校生の皆さんがしっかり聞いて受けとめていることがすごいなと思った。

今日は民話もいろいろ語ってもらったが、民話は、やはり最悪の事態を乗り越えるための次世代に対する言い残しだったんだなと今日も感じた。先ほどから島津さんの話が出ていて、瀬尾さんも丸森でお世話になったと思うが、島津さんにも何かエールを送ってほしいと電話したので、島津さんにバトンタッチしたい。

### 島津信子さん(みやぎ民話の会会長)

瀬尾さんと加藤恵子さんのお話を聞きながら、民話を語り継いでくるには、やはり語る人の人生とか、生きている環境とか、今、最悪の事態という言葉がでたが、いろんな知恵があったり、勇気があったり、そういうものが語られてきたんだろうと思う。東日本大震災の語りは、とにかく誰かが伝えなければならないものだと思うし、それを語る人たちが年を経てだんだんと語れなくなってい

くから、それを聞いた者が何らかの形で残す努力をしなければならない。そういう意味で、瀬尾さんはとてもいい形で、本、展覧会、映像にしてくれているし、私たちはやはり語ることで語り継ぐことをしていかなければならない。

今日、大学の学生や高校生が聞いてくれて、自分の目で見て感じたことを発表してくれるのがすごくよかったと思うが、やはりある程度まで大人が仕組みでやらないと、自分ではなかなか動き出せない、そういう場を設けて、そしてできるだけ自分から動き出す、そういう若い人を育てていかなければならない、そういう役割が今の私たちなのかなと思った。

毎年次々に起こる災害があり、東日本大震災だけではないことがこれからももっともって予想されるわけで、長期にわたって立命館大学の先生方が学生さんに仕組みで、こういう場を設けてくださっていること、本当にすごいことだと感じている。

## 第3部 交流会

第3部は交流会ということで、全体で感想をシェアした後、ブレイクアウトルームに分かれてグループ交流を行った。

団士郎さんから、今日の感想として、「過去の出来事というのではなくて、いろいろあったその場所で出会ったり、学んだこと、その場所で受けとめたことを話したり、感じたりすることがぐっと前に出てきている感じがして、改めてそれがいいなと思った。このプロジェクトのきっかけになった災害そのものは2011年の3月11日に起こっていて、それは時間的にはそこに属しているけれど

も、学ぶ人とか、そのことを今日のような形で考えたりしている人は、みんなそれぞれ今にいます。去年参加した人は去年のその今にいたし、今年参加した人は今年のその今に属している。そういう意味で言うと、人はいつでも自分が今見えること、今自分が向き合えることに遭遇して、そこで何かを受けとめたり、感じ取ったりする。クロアチアに観光で行ったことをふと思い出した。ユーゴ内戦という難しい戦争があって、その戦争の銃弾の痕とか大砲が壊したものとかが、まだそこにずっと残っている。公の建物の中の壁に刻まれている銃弾の連射したダダダダって跡がそのまま残してある。ユーゴ内戦のことは情報としては知っていたが、実際に行ってみて、銃弾の残った壁を見たり、戦後再復興して今、暮らしている人がいるのを見た時に、届いてくるものがあった。つまり観光に行き、今、それを見ていて、これは昔のことという風に見えるけれども、戦争の遺構とか、傷痕というものが届けてくる何か、それは雄弁だと思った。今日の話の中に、例えばモノを持ってきてもらったり、博物館や様々な形で残されていっているもの話がたくさんでてきたが、それは過去の出来事の証拠ではなくて、それが今に持ち越されて、その場所にあって、それに今、出会う人がある。それに出会いに行く人がある。よく話題になる風化とか風評というのも今に属している言葉だと思うが、要するに、今自分が見に行く、あるいはそこへ行って、今自分がそこから受けとめる。それは昔の事実を知っている人がわかっているではなくて、今見に行く人がそのことから受けとめるという、その力が多分、風評とか風化とかいう言葉が持っている今に対する強い対抗力にな

る。風化している今、風評にもてあそばれているという状況を評論的に語るのではなく、それに対抗する形で、今そのことを見ている人間が受けとめるものがこんなにあるという、なんかそういうことがここで行われている仕事かな、そういうことを行うということが大切だということを、今日改めて感じていた」と語った。

今回のテーマは「語り継ぐ一命のバトンを手渡す」ということで、短い時間だったが、たくさんの人たちから少しずつお話を頂き、改めて語る、聞く、伝えるということを考えて。語らざるを得ない人たちがいて、それを聞かせていただく一方で、やはり語れない人たちがずっといて、そのことにも眼を向けていたい。最近になって、「震災の時の経験を初めて語ります」という方のお話を聞かせていただく機会があり、聞かせて頂くということはなんと尊い、貴重でありがたいことなのかとつくづく思った。そういう意味では、語りとは、ひとつひとつが真珠のような宝物で、それを受け取りきれずに、あちこちにバラバラにあって、それをきちんと拾って、ひとつひとつ大切に見える形にして、また次の世代に渡していくことが必要なんだと思う。その作業が今の社会で難しくなっている。語り継がれてきた民話は、聞き取って文字にしてくれたら、語り継いでくれる方たちの存在があって、長い長い時代を生き延びて今にある。今日もここでたくさんの小さな物語を聞かせて頂いたが、それが50年後、100年後、200年後まで生き残れるかは私たちがどんな形でこれを残し、受け継いでいけるかにかかっているのだとあらためて思った。

つづく